

あの人の嘯が聞きたくなった

門口に立っていたら、白髪の老人がやや左右に体を揺らしながらゆっくりゆっくり歩いて来た。30年ほど前に「花炭」や「松ぼっくりの炭」を作ったことがあるE子さんだ。視力が衰えて、聴力にも若干問題があるが、いくつかの闘病を経て再び近所を散歩できる状態に復活した。足元はややゆったり気味ではあるが、背筋が伸びているのが驚き。聴力に問題があるためか、話す声が大変大声で、近くを通る人は驚きの視線を投げて通り過ぎていく。時候の挨拶をすると、近況を語り始めた。

歩けなくなったらもう暮らしていけないから 毎日少しずつでも歩こうと思って
この先の四つ角で曲がって家に帰るの たったそれだけ
スーパーへ買物に行って 郵便局へ行ってこられる力がないと生きて行かれないからね
私の友達がね この間お風呂に入ったまま死んじゃったの
そのまま、誰も気がつかないでねえ・・・
近所を眺めて お風呂に電気が点いている家を見ると心配になって
ちゃんと電気が消えると「無事だったな」と思って安心するの
隣の奥さんにその話をしたの
私は一人暮らしなので 家の風呂場の電気が点きっぱなしだったら 気にかけてね
ってお願いしたの。お宅は夫婦で暮らしているから安心よねって言ったらねえ
その奥さんが言うには、ご主人は脳梗塞で入院してしまったんだって

ここで「ところで E子さん いくつ(何才)になったんですか」と聞くと

96才になっちゃったのよ

「96才で 一人暮らしができて こうして散歩もできて 大きな声でお喋りもできて 凄いよねえ」と言うと

歩けなくなったらもう暮らしていけないから 毎日少しずつでも歩こうと思って
この先の四つ角で曲がって家に帰るの たったそれだけ
スーパーへ買物に行って 郵便局へ行ってこられる力がないと生きて行かれないからね
私の友達がね……………

何気なく話し相手をしていたら、どうも同じ語りが繰り返されているような気がしてきた。

終って見たら、五回同じ話を聞いたようだった。

日も落ち始めていたので、「日が沈んできたから、寒くならないうちに家に帰った方がいいね」と言って背中を押して別れた。E子さんが四つ角を曲がるのを見届けて、家に入った。

一人で暮らし、買物もできるし、外出も散歩もそれなりにはできる。何よりも姿勢が良く、大きな声でお喋りができる。庭の草木を愛で、食べるものも自分で作って・・・、生きる力の証のように感じる。

それほどに元気な96才ではあるが、少しずつ「老い」が迫って来ているのかもしれない。

それほどに元気な96才ではあるが、少しずつ「老い」が迫って来ているのかもしれない。

それほどに元気な96才ではあるが、少しずつ「老い」が迫って来ているのかもしれない。

何だか妙に、上方落語の「住吉駕籠」が聞きたくなった夕暮だった。